

「シラネコムギ」の減数分裂期追肥の増量による穂揃期追肥の省略

古川農業試験場

1 取り上げた理由

本県産「シラネコムギ」は子実粗タンパク質含有率が低く、バラつきが大きいことが実需者から指摘されており、改善を求められている。その要因の1つとして、子実粗タンパク質含有率向上を主な目的とした穂揃期追肥が、水稲作等との作業の競合により困難であることが指摘されている。そこで、減数分裂期追肥の増量により、子実粗タンパク質含有率を慣行栽培と同程度に維持しつつ、穂揃期追肥を省略する施肥体系について検討したところ、減数分裂期追肥量の目安が得られたので参考資料とする。

2 参考資料

- 1) 減数分裂期追肥を窒素成分で8～9kg/10a程度に増量することで慣行施肥（窒素分量：減数分裂期5kg/10a，穂揃期2.5kg/10a）とほぼ同等の子実粗タンパク質含有率が得られ，穂揃期追肥を省略できる（図1）。
- 2) 減数分裂期追肥を窒素成分で8～9kg/10aにした場合でも，収量，容積重，千粒重，外観品質等は慣行栽培とほぼ同等である（表1）。

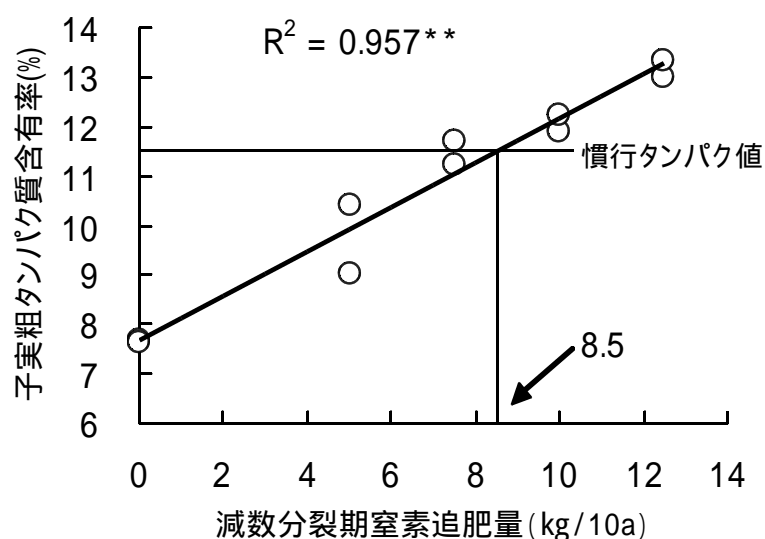


図1 減数分裂期窒素追肥と子実粗タンパク質含有率（平成16、18年）

基肥、幼穂形成期追肥は全区同様に行っており、窒素量は基肥8kg/10a、幼穂形成期追肥2.5kg/10aである。

図中のデータは穂揃期追肥なしの区である。慣行施肥は減数分裂期5kg/10a、穂揃期2.5kg/10aである。

3 利活用の留意点

- 1) 減数分裂期の判断は「普及に移す技術第83号」（参考資料）「小麦の葉耳間長による幼穂長の推定及び出穂期の予測」を参考にする。
- 2) 本試験の追肥には硫酸を使用した。

（問い合わせ先：古川農業試験場水田利用部 電話0229 - 26 - 5106）

#### 4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間 転換畑における麦類生育と均質化技術の確立 平成16～18年

2) 参考データ

表1 収量調査(平成16、18年)

| 区名        | H16           |              |            | H18           |              |            | 検査等級<br>2.4mm調整 |
|-----------|---------------|--------------|------------|---------------|--------------|------------|-----------------|
|           | 子実重<br>(kg/a) | 容積重<br>(g/L) | 千粒重<br>(g) | 子実重<br>(kg/a) | 容積重<br>(g/L) | 千粒重<br>(g) |                 |
| 0-0       | 34.8          | 802          | 43.8       | 54.9          | 754          | 38.5       | 1等中             |
| 5-0       | 43.9          | 821          | 42.3       | 66.5          | 785          | 42.9       | 1等上             |
| 7.5-0     | 45.3          | 816          | 42.6       | 69.3          | 786          | 43.7       | 1等中             |
| 10-0      | 52.5          | 825          | 43.6       | 78.2          | 785          | 43.1       | 1等下             |
| 12.5-0    | 50.8          | 818          | 41.3       | 70.2          | 786          | 43.8       | 2等上             |
| 5-2.5(慣行) | 44.9          | 820          | 43.3       | 75.7          | 785          | 43.7       | 2等上             |

試験区名は追肥時期と窒素追肥量(kg/10a)を表し、「減数分裂期 - 穂揃期」である。

検査等級は東北農政局食糧部による判定

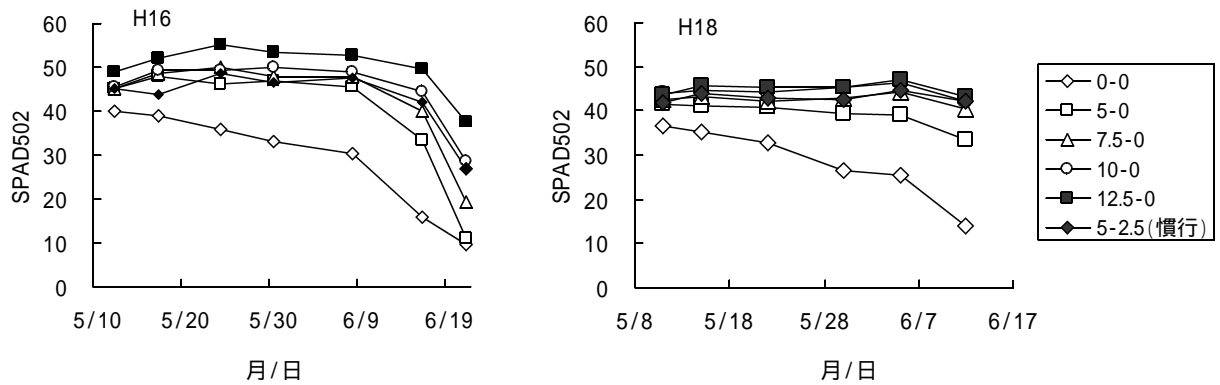


図2 登熟期間のSPAD値の推移(平成16、18年)

SPAD値は両年とも穂揃期以降

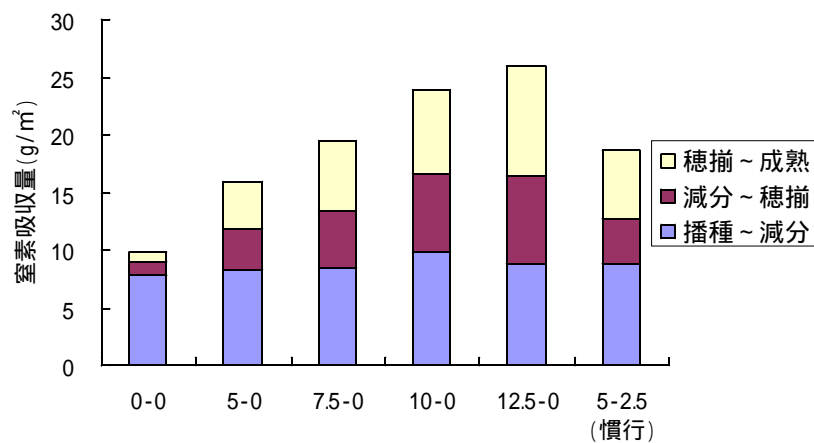


図3 期間別窒素吸収量(平成18年)

3) 発表論文等 なし